様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２５　年　３　月３１日現在

機関番号：14602
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2012
課題番号：22720080
研究課題名（和文）　鎌倉中期の古典注釈に現れる言語意識についての総合的研究
研究課題名（英文）　A Synchronic Study of a Linguistic Outlook in the Commentaries on the Classical Works of the Mid-Kamakura Period
研究代表者
岡崎　真紀子（OKAZAKO MAKIKO）
奈良女子大学・人文科学系・准教授
研究者番号：30515408

研究成果の概要（和文）：
鎌倉中期の文永～永仁年間には、仙覚『万葉集註釈』、源氏物語の注釈書である『紫明抄』、古今集の注釈書である『三流抄』などが成立した。本研究では、これらを同時代の学芸とみなし、ジャンル横断的にとらえて、この時代の注釈書の特徴について考察した。とくに、悉曇学（梵語の文字と音韻の学問）の考え方が、古典文学の注釈書と深い関わりを持っていることに着目して、注釈書に見られる言語意識を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
In the mid-Kamakura Period Sengaku, a Buddhist monk and scholar, completed a commentary on *Manyō-shū* titled *Manyō-shū-chūshaku*. In the same period there were also written some other commentaries on the classical works such as *Shimei-shō* and *Sanryū-shō* which annotated on *Genji-monogatari* and *Kokin-shū* respectively. The aim of this study is to synchronically examine a linguistic outlook in those contemporary commentaries which were all under the profound influence of “sittan-gaku,” the philology of Sanskrit named after Siddham.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：日本文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：和歌、悉曇学、古典注釈、言語意識

１．研究開始当初の背景
(1)国内外の研究動向
近年、国内・国外の日本文学研究において、『古今和歌集』や『源氏物語』、『萬葉集』といった主要な古典文学を、享受史という視点からとらえる研究が深まっている。それとともに、院政期以降に成立した、いわゆる子注釈を対象とする研究も進展してきた。

そこで、いっそう考究すべきは、文永～永仁年間（1264-1298）の古典注釈学ではないかと考えた。その時期に、仙覚『萬葉集註釈』や源氏物語註釈の素寂『紫明抄』、『弘安十年古今集歌注』『三流抄』などの古今集注釈、歌学書『野守鏡』、仏教悉曇学の了尊『悉曇輪略図抄』といった古典注釈・学問書が集中して成立してくることは注目に値するからである。これらの文献については、個々のテクストに関する研究はある程度進んでいるが、未だ十分とは言えない。一例をあげれば、仙覚については、時枝誠記「古典註釈に現れた語学的方法」（1931 年初出、『言語本質論』所収）以後、近年の小川靖彦『萬葉学史の研究』（2007 年）の優れた成果があるものの、『萬葉集註釈』の注釈言説そのものを読み込む部分では検討すべき点を多く残している。とくに、仙覚の方法と悉曇学の関わりを文学研究の側から考えた研究は稀である。さらに、個々のテクストを見るだけではなく、鎌倉中期の古典注釈学のあり方を横の広がりでとらえる観点からの研究となると、未だほとんどなされていないと言っていいように思われた。

(2)本研究の着想と位置づけ

以上のような背景のなかで、さまざまなジャンルの古典注釈を総合的にとらえる研究によって、鎌倉中期の言語意識を明らかにできないかと着想するにいたった。こうした着想にもとづく研究は、注釈書への関心という近年の文学研究における潮流と連動しながらも、従来にはない新たな視点を提示することによって、学界に一石を投じるものと位置づけられるであろう。

２．研究の目的

(1)研究目的の概要

鎌倉中期に成立した、仙覚『萬葉集註釈』、『紫明抄』、『三流抄』、『野守鏡』などの古注釈や歌学書を、同時代に成立した学芸として、ジャンルを横断して広くとらえる。そのうえで、先行する院政期の古注釈や歌学書とも比較して、鎌倉中期の古典注釈の特性を考察する。具体的には、和語を注釈する際に漢語を宛てる説や、悉曇学（梵語の文字と音韻の学問）にもとづく音韻相通説や音義説といった日本語学的な注釈方法が、上記の文献に共通して現れることに着目した。それらを検討することによって、鎌倉中期という時期における、自国の言語に対する自覚的認識、すなわち和語への意識のありようを、総合的に明らかにすることを目的とする。

(2)研究代表者の研究の歩みと本研究の位置

研究代表者は本研究を開始する以前、主に歌人源俊頼の文学活動を中心に、院政期における和歌や歌学について考えてきた。特に注目してきたのは、先行する平安文学の享受と、仏教の受容という問題である。その研究を通して浮かび上がってきたのは、和語（やまとことば、日本語）によって文学表現が生み出されるとはいかなることかという普遍的な問題意識であった。その成果は、著書『やまとことば表現論―源俊頼へ』（2008 年、笠間書院）にまとめたところであった。

これをふまえ、その後は考察する時代の範囲を広げ、院政期から鎌倉中期までの歌学書を例として、和語をめぐる問題意識を深めていった。そこで、平成 20～21 年度科学研究費補助金（若手研究スタートアップ）の交付を得た研究課題「平安鎌倉期における歌学と仏典注釈の相互交流についての学際的研究」において、具体的な考察を進めた。

上記の研究を進めた過程で、鎌倉中期の古典註釈がとくに重要であると認識し、より掘り下げて検討する必要があると考えたのである。

(3)本研究のアプローチの独自性

鎌倉中期の歌学書類には、同時代に成立した源氏物語注釈や仏典注釈、悉曇学書と通底する注釈方法や思想が認められる。また、文永・弘安の役（蒙古襲来）による対外的な危機意識が高まった時代の風潮を反映してか、我が国の言語のあり方に対する自覚的な言及も、おおかたの文献に共通して現れており、注目される。にもかかわらず、従来の研究方法においては、ジャンルごとに棲み分けで研究を進める傾向が少なからず見られるように思われた。そこで本研究においては、考察する時代の範囲を鎌倉中期に絞り、同時代の注釈言説をジャンル横断的に検討するという独自なアプローチによって、鎌倉中期における言語意識を明らかにしようとしたのである。

３．研究の方法

(1)研究の基礎

本研究の基軸は、仙覚『萬葉集註釈』の読解と検討に置く。そのうえで次に、他の鎌倉中期の古典註釈や歌学書に目を広げて検討をおこなうという順序で進めた。

まず、研究を進めるための基礎となる、研究対象とする文献の本文を整えることから始めた。『萬葉集註釈』は、萬葉集叢書に翻刻があるものの、信頼できる活字の本文が完全に整っているとは言い難い。よって、伝本の調査と本文の校勘からはじめ、翻刻本文を完成させることとした。国文学研究資料館のマイクロフィルム資料を活用しつつ、各地の蔵書の調査もおこなった。

源氏物語注釈の『紫明抄』や古今集注釈の『三流抄』は便宜既刊の翻刻本文によった。

悉曇学書については、大正新修大蔵経の翻刻にくわえ、馬淵和夫氏の画期的な労作『影印注解悉曇学書選集』がある。これに主な文献が注解を付して影印で紹介されており、鎌倉中期の了尊『悉曇輪略図抄』も収載されているので、その本文によって考察を進めていった。

(2)研究方法の概要

上記のように、対象とする文献の本文を整えたうえで、具体的な考察にはいった。まず、各文献を精読し、それぞれの注釈言説のなかから、音韻相通説や音義説、和語に漢字を宛てて注釈する説などといった、日本語学的方法が色濃い記述を抜き出して、収集・整理した。そのうえで、当時の言語意識を象徴的にうかがわせる用例にとくに着目して、論文として研究成果をまとめる方法に展開していった。以下に研究方法のイメージを、波線内に図示しておく。

仙覚『萬葉集註釈』本文の検討
↓
『悉曇輪略図抄』そのほか悉曇学書の言説との相関を考察する
↓
・音韻相通説
・音義説　　等に着目
↓
仙覚の注釈方法と言語意識を検証する
↓
『紫明抄』、古今集注釈、野守鏡等同時代の言説と通底する思考を見出す
↓
鎌倉中期における言語意識を総合的に明らかにする

(3)研究の具体的な実践方法

本研究の期間において、だいたい次のような方法により研究を具体的に実践した。

① 仙覚『萬葉集註釈』について、仁和寺本（京都大学国語国文資料叢書所収の影印）を底本とし、冷泉家本（冷泉家時雨亭叢書所収の影印）や、国文学研究資料館蔵本と対校しながら、本文を検討した。
② 仙覚『萬葉集註釈』から、いわゆる音義説にもとづく注釈言説や、音韻相通説にもとづく叙述、悉曇学に淵源がある用語などを抽出して整理・検討した。
③ 了尊『悉曇輪略図抄』や、院政期の明覚『悉曇要訣』『梵字形音義』などといった悉曇学書を参照して、仙覚の言説と通底することを確認し、考察した。
④ 『紫明抄』『三流抄』などといった、他のジャンルの古典注釈を検討して、上記の③において確認したような言説と通底する発想が見られることを確認し、考察した。
⑤ 上記の①～④で実践した研究成果をふまえ、鎌倉中期における言語意識の特性について検討した。

４．研究成果

(1) 研究成果の概要

鎌倉中期の文永～永仁年間に成立した、仙覚『万葉集註釈』、源氏物語注釈書の『紫明抄』、古今集注釈書の『三流抄』などを同時代の学芸とみなし、ジャンル横断的にとらえて、この時代の注釈書の特徴について考察した。とくに、悉曇学（梵語の文字と音韻の学問）の考え方が、古典文学の注釈書と深い関わりを持っていることを見出して、考察の対象とした。その結果、鎌倉中期における自国の言語への自覚的意識（和語への意識）は、個々の音や文字のレベルに踏み込んだところで掘り下げたものであって、それ以前に時代における言語意識に比して、ことばへの自覚が先鋭化していることを明らかにした。

(2) 研究成果の具体的なポイント

本研究の研究成果は多岐にわたるが、以下に主な成果の具体例を列挙することとする。

① 仙覚『萬葉集註釈』について、本文を検討したうえで内容の精読を深めることができた。
② 仙覚の叙述に現れる音義説に着目した。音義説とは、たとえば、「浜（ハマ）」という和語について「ハはハヤキ義、マはマハレルの義」のように、単語を一字音字一音に分解して、それぞれに字義をあてて、ことばの意味を説明する考え方である。こうした音義説は、文字というものに深遠な意味を求める密教的な思想や、それを根底とする悉曇学とゆかりが深いと考えられる。しかも、仙覚以前の歌学書には見られず、『萬葉集註釈』に特徴的に現れるものである。くわえて、同時代における古今集注釈に見られる、古今和歌集という書名の「古今」という文字に意味を付会して説をたててゆく注釈の思想にも繋がるところがあると思われた。以上のことから、音義説を中心に仙覚の言説を検討することによって、鎌倉中期の古典註釈に見られる言語意識の一端を明らかにした。
③ 了尊『悉曇輪略図抄』に見られる、和語（やまとことば、日本語）について言及した叙述について、日本文学研究の側から考察を深めた。とくに、いわゆる「いろは歌」が掲出し、音図にもとづいて和

語の音韻についてまとめ、それを五行思想とかかわらせて論理化する意識が見られることに着目した。こうした意識は、院政期の明覚の悉曇学書にも見られるが、了尊の言説はより和語に引き寄せた思想がうかがえ、同時代の古典注釈に見られることばに対する物の考え方を探るうえでも示唆的であった。『悉曇輪略図抄』の言説の分析は、ある程度の成果をあげることができたが、まだまだ検討の余地を残しており、今後さらに研究を深めてゆくつもりである。

④ 仙覚『萬葉集註釈』や『三流抄』『紫明抄』に現れる、音韻相通説にもとづく叙述を検討し、その叙述の背景にある考え方を考察した。音韻相通説とは、たとえば「タノム（頼む）」と「タノモ（田の面）」はムとモが同行の字音で通じ合うから、意味上も交替しうると捉える考え方である。こうした考え方は、院政期の歌学書から現れ、和歌のことばの注釈に旺盛に援用されたのだった。これは、明覚の悉曇学書とゆかりが深いと指摘されている。鎌倉中期の古典注釈にも、音韻相通説にもとづく叙述は少なからず見られることから、院政期以来の言語意識が定着していたことがうかがえる。ただ、仙覚その他の鎌倉中期の言説は、それ以前の言説と質的に同じではない。仙覚では、「男声」「女声」といった、院政期の歌学書には見られないような、悉曇学に淵源がある用語を駆使して万葉語を解説しようとする姿勢が見られる。また、古今集注釈においては、音韻相通を介して歌語に抽象的な意味を託そうする思考も見られる。以上のことから、鎌倉中期における言語意識のあり方をうかがい知ることができた。

⑤ 『紫明抄』に見られる、源氏物語の語彙を注釈するにあたって、和語に漢字を宛てて解釈する説に着目して考察した。音義説や音韻相通説が、和語を表記する文字である仮名について「音」の側からアプローチする姿勢だとすれば、和語に漢字を宛てて解釈する説は、仮名を「文字」としてとらえる姿勢だと言えよう。仮名が表音文字であるのに対して、漢字は表意文字である。仮名で表記する和語を、漢字で表記する漢語、しかも漢詩文の古典に典拠のあることばに付会することで、和語への注釈言説には、ある種の権威性が託されるのではないだろうか。そうした言語意識は、仮名の一字音一字音に意味を求めようとする音義説の考え方や、音韻相通にもとづく注釈によって歌語に抽象的な意味を託そうとする考え方に、通底しているように思われるのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① 岡崎真紀子、『発心和歌集』の詠歌と享受、叙説、査読無、40 号、2013、147-161
② 岡崎真紀子、勅撰和歌集序という論理―『千載集』から『新続古今集』へ、日本文学、査読有、61 巻 7 号、2013、22-32
③ 岡崎真紀子、中世歌学における言語意識―仙覚『萬葉集註釈』をめぐって―、『中世の学芸と古典注釈』、査読無、竹林舎刊、2011、261-286
④ 岡崎真紀子、歌ことば「鴫の羽がき」、『鳥獣虫魚の文学史　鳥の巻』、査読無、三弥井書店刊、2011、179-195
⑤ 岡崎真紀子、源俊頼の連歌と和歌、文学隔月刊、査読有、12 巻 4 号、2011、70-85
⑥ 岡崎真紀子、覚如の歌、円空の歌、『聖なる声』、査読無、三弥井書店刊、2011、156-176

〔学会発表〕（計 2 件）

① 岡崎真紀子、『発心和歌集』の詠歌と享受、和歌文学会関西例会、2012 年 12 月 1 日、大阪大学
② 岡崎真紀子、院政期における歌学と悉曇学、和歌文学会例会、2011 年 11 月 19 日、昭和女子大学

〔図書〕（計 1 件）

① 岡崎真紀子・千本英史・土方洋一・前田雅之、高校生からの古典読本、平凡社、2012 年、390 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
特になし

６．研究組織
(1)研究代表者
岡崎　真紀子（OKAAKI MAKIKO）
奈良女子大学・人文科学系・准教授
研究者番号：30515408

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし